家庭における新入園児のための準備

宇田川照子

親や兄妹など肉親の愛で結ばれた家庭生活から、入園を機会に、幼児は、幼稚園という新しい環境の中にはいるのであるが、その新しい生活は、同年令の子どもの集団生活であり、今までの家庭生活とは、全く質の違う生活である。幼児がこの生活の変化にうまく適応してゆくためには、幼稚園側のなみなみならぬ努力（準備）が必要であるが、家庭の親の準備もまたそれ以上に必要である。新入園児のための幼稚園側の準備、計画などは、たびたび取り上げられる問題なので、今日は主として家庭の側から、子どもを幼稚園へ入園させるに当ってどんな準備をすべきか考えてみたいと思う。

家庭での準備を知るためには先ず、幼稚園生活は何をするところか、を知らなければならない。幼稚園で幼児は、歌をうたい、遊戯をし、絵をかき、庭で遊んだりする。しかもそれらはすべて幼児の集団生活を通して行なわれる。集団生活、社会生活をぬきにして、幼稚園生活は考えられないのである。幼稚園は、家庭のわくから仲間すなわち友達との生活の中によりどころを求め、その集団の生活の中から社会の一員としての行動の仕方を学ぶところである。そこで家庭では、このような社会生活である幼稚園へ入園させる準備として何をなすべきか。先ず、集団生活に堪え得る体力、健康であり、そして社会的生活能力であると考えられる。三歳の幼児が幼稚園で集団生活を行なうには、三歳の子どもとしての集団生活を可能とするような、社会的生活能力の基礎を、そして、四歳、五歳の子どもには、四歳、五歳の子どもに相応な社会的生活能力の基礎を、日頃のしつけの中で育てておくべきである。

この社会的生活能力ということについて、もう少しくわしく記してみよう。

子どもは誕生後しばらくは母親との生活が主であり、だんだんに母親以外の家庭を知り、更に、這ったり歩くようになって生活の場がひろがり、ことばを習得し、やがて排尿排便が自立し、衣服や履物の脱着が可能になり、三歳位になると、家庭以外の集団生活へ進出してゆくための準備が一応できあがるのである。こうして社会生活に必要な準備は三歳頃までに、一応家庭内で完成して、次に幼稚園とか小学校とかの家庭外の集団との接触によって、より高度な社

会生活能力を伸ばしてゆくことになるのである。このようにいろいろな社会生活に必要な能力を、社会的生活能力というのである。この社会的生活能力というのは、知能などのように、生来の能力であるか、習得される能力であるか、まだ明らかでないが、知的能力は低くとも、社会的生活能力がかなりある子どももいることから、この社会的生活能力は、知能とは無関係ではないが、非常に生活条件に左右され、ゆえにそれらは育成することのできるものであり、社会的環境の中で習得されるものであると考えられている。

では具体的に、家庭でしつけるべき社会的生活能力とは何であろうか　この社会的生活能力については、いろいろの人が研究しているが、ここでは、牛島義友氏の作成された「社会的生活能力検査」にもとづいて、家庭の親のしつけるべき、社会的生活能力の基準となるべきものを考えてみよう。

その検査は主として次のような場面を観察の場面として、検査問題が作られている。

○基本的習慣の自立
○生活力の危険に対する防御力
○用具の使用力
○行動範囲の拡大
○遊びにおける社会関係
○社会活動への参加と手伝
○社会的遺産の獲得としての常識的知識

そして、その問題は各年令に数問ずつ困難度に応じて配列されている。そこでその問題から、逆に、その年令の子どもが大体身につけている社会的生活能力を知り、家庭の親がしつけるべき社会的生活能力の基準を知ろうと思うのである。

三年保育児の場合

満三歳になれば、三年保育児として幼稚園へ入園を許されるのであるが、前に記したように、三歳頃になってどうにか集団生活にはいる一応の準備ができあがるのであって、まだまだ三歳の幼児は非常に幼いものである。しかしながら、三年保育児として幼稚園へ入園する以上、集団生活をしてゆく上に最低に必要な能力だけは、しっかりと身につけておかなければならない。三年保育児といって、四月に満三歳になったばかりの早生れ児から、三歳十一ヵ月のおそ生れ児まで、年令も大きく能力も違ってくるが、左に記す能力だけは、家庭で一応準備すべきである。

1　排尿を予告する。
　大小便を事前に知らせることは、最低の能力として、ぜひ身につけていなければならない。

2　上衣が脱げたり、上衣のボタンが、かけられる。
　ボタンや紐はとけなくても上衣を自分で脱いだり、また前面のボタンなら自分でかけられること。

3　匙や箸を使って完全にひとりで食事ができる。
　左右を問わないがおとなが助けてやらなくともひとりで食べ

られること。

4　手を洗ったり顔を洗うことができる。

5　靴がひとりではける。
特に複雑でないならひとりで靴がはけたり、下駄を自由にはきこなす。

6　排尿の自立。
付添ってやらないでも、またパンツをとってやらないでも自分ひとりでできること。

7　鼻をかむことができる。

8　小さな怪我ではすぐ泣かない。

9　排便の自立。
完全にひとりで排便し紙で後始末までできること。

二年保育児の場合

二年保育児ともなれば、三年保育児が身につけるべき能力を完全に身につけた上に更に次のような能力も持つべきである。

1　平常着ならおとなの手を煩わさずに自分で着る。

2　長上の人に挨拶する。

3　鋏で形をきりぬくことができる。
単に鋏で紙をきるだけでなく簡単な形のものを上手でなくとも切りぬけること。

4　紐が結べる。

一年保育児の場合

一年保育児は幼稚園生活を一年して間もなく幼稚園よりもっと大きい小学校集団にはいるのであるから、身につけるべき能力は更に高度となるのは勿論である。

1　歯をみがくことができる。

2　踏切りをひとりで渡ったり、自動車の多く通る道を、引いたり傍で注意しなくても、ひとりで歩いて安全であること。

3　双六やカルタができること。
複雑な規則は守れなくともよい。

4　時々寝具の片付け、庭掃除や炊事の後片付けなどの手伝いができること。

5　四粁位なら平気で連れて歩ける。
疲れてぐずったりしないこと。

6　厚紙が切れる。

7　小さな怪我をした場合自分でアカチンやメンソレータムなどつけられる。

以上のような能力を新しく入園する子ども達に、集団生活の基礎となる能力として、家庭でしっかり身につけておくべきであると思うが、このような見地から考えると、入園の準備はすでに誕生にはじまり、誕生以来、一個の社会人としての正しいしつけが行なわれていれば、入園のための特別の準備は必要ではない。幼稚園へ入園する準備は、家庭で社会人としての基礎を養っておくことである、といって過言ではないと思うのである。